

人間にとって宗教とは — 北東アフリカからの問いかけ

第2部 エチオピアの宗教：絶え間なき再生

精霊憑依と想像の空間

—エチオピア西南部ホールにおける伝統・近代化・女性の抵抗—

宮脇幸生

〇はじめに

先ほど佐藤さんはマジヤングルで伝統宗教から新たな外部の宗教へと完全に変わってしまった事例をお話しされましたが、私は伝統と、外部のシンボルを利用した精霊カルトが共存している事例についてお話ししたいと思います。

私が調査しておりますのは、エチオピア西南部のホールという農牧社会で、かなり乾燥した低地にあります。先ほど佐藤さんがお話しされたマジヤングルから南に下がった、スーダンやケニアとの国境のあたりです。

エチオピア西南部の農牧社会のイメージというのは、現代の日本では、テレビで放映されたイメージなどから、国家の影響を受けておらず、伝統文化が残っている地域と考えられています。これには二重の見方があります。ひとつは野蛮、あるいは未開というイメージ、もう一つは近代文明に汚されていない純粋な伝統文化が残っているというイメージ、どちらにしてもエキゾチックなイメージで見られています。

そのような見方を、10数年前までは人類学者も共有していました。なぜかと言いますと、彼らと一緒に暮らしていると、彼ら自身が、自分たちは伝統のもとで生きているという形で、自分たちの文化を表象するということが多いからだと思います。けれども彼らの社会を取り囲んでいる国家、世界経済、NGO、ツーリストあるいはミッションなどの影響というのは、私の経験でははっきりと語られることは少ないような気がします。ですから、そこに長期間滞在する人類学者の方が、余計にそうした伝統にとらえられるという部分がある

ような気がするわけです。

しかし、ホールを見てみますと、これからお話しする憑依カルトにおいて、こうした外部の影響がはっきりと出てきます。外国人、あるいは支配民族でありキリスト教徒であるアムハラ、それからソマリの交易者といったものの影響がはっきり出ています。以下は、この地域で、伝統文化と外部の影響を表象するものが、いかにして汀を接するように共存しているのかを明らかにしていきたいと思います。

さて、オーソドックスな宗教人類学の研究では、精霊憑依は社会の周縁的な地位にある人々に生ずると言われています。例えば女性とか、被差別集団に属しているような人びとです。そういった人々は、精霊に憑依され、精霊の威を借りることで、普段は言えないようなことも言うことができる。それによって、社会的経済的な利得を得る、だから精霊憑依というものが起こるのであると言われてきました。そのようなときに憑依する精霊は、しばしば敵対民族のようなその社会にとって周縁的なものとなります。どうしてそうなるかと言うと、憑依された者の非社会的・没倫理的な振る舞い、その社会の伝統にはよらない振る舞いの原因を、精霊のもつ周縁的な性格に帰することが出来るから、そのような性格の精霊が憑依するのだと言われていました。本当にそうなのでしょうか。

これらの人類学の定型的な解釈が、はたしてこれから述べるホールについて当てはまるのかどうかを見ていきたいと思います。最初に、ホールの伝統とその社会組織について簡単にお話しします。

次に、精霊憑依カルトについてお話ししたいと思います。最後に、ホールの精霊憑依に、これらの人類学の定式が、当てはまるかどうかということを考えてみたいと思います。

ホールはエチオピア西南部に居住する人口およそ3000人の小さな民族です。四つの地域集団に分かれていて、氾濫原農法と牧畜によって生活をしています。首長と年齢階梯制度のなかで上位の長老集団が権力を持つという集団です。

居住域はひじょうに乾燥した地域にあり、サバンナ地帯では牛や羊の放牧が行われています。それに対して、中央を流れるウェイト川は年に2回季節的に氾濫して、そこが氾濫原農法の舞台となります。氾濫後の水が引いた後に、肥沃な土地が現れ、モロコシの栽培が行われます。

□ホール社会の秩序

ホールの社会は、父系親族集団によって構成されています。この父系親族集団の間を女性は婚姻によって、牛と交換されるという形で移動します。そうした親族集団を集落単位で纏めているのが年齢階梯制で、そのなかから長老が選ばれます。そのさらに上位にカウォットと呼ばれる首長がいます。

首長は、もともと外部からやって来た異民族の首長であると言われていました。首長筋は雨をコントロールする力を持っており、初めてホールに来たときにはその力を利用して土着の首長を屈服させ、女性や家畜、氾濫原を独占したと伝えられています。しかし土着の人びとは横暴な首長筋に対して反撃を加え、彼らをもつばら神から豊かさを引き出す儀礼的な力を用いるだけのポジションに位置づけました。現在首長は、女性にたとえられています。彼らは暴力的なものには近づくことができず、男性長老たちによってサポートされ、多産の源である雨を降らせ、神から豊饒の力を引き出すのです。

ホールでは男性は、このような外部の男性的・暴力的な力を、内部の女性的・平和で多産な力に転換し、それを守る役割を担います。第1に、戦士としての役割が重要視されます。それは、牛を隣接民族による略奪から守るものとしての役割です。2番目に、外部から豊饒の力を獲得する者としての役割というのがあります。これは、特定の

敵対民族を殺すとその血によってホールの全てが豊かになるという考えにもとづいています。つまり、特定の敵対民族、具体的に言うとマーレ、サンプル、ボラナと呼ばれる民族ですが、彼らを殺すとその血によって牛はたくさん仔を産み、ミルクをたくさん出し、畑には作物が実り、妻は多くの子を産み、自分も長生きする、とホールの人々は言います。第3に、女性を守護し、婚姻によって女性を交換する者としての役割があります。最後に、年齢階梯の長老として首長の両義的な力を制御し、多産をもたらすようにコントロールするという役割があります。

女性の役割は何かというと、こうした男性が獲得してくる豊饒の力を実現する者としての役割を持っていると考えられます。女性的な価値は、多産、豊かさ、平和あるいは水と結びつけられます。結婚するときには、女性性器切除と呼ばれる外性器を切り取る施術を受けます。結婚して子どもを産むと初めて完全な女性になると考えられています。そこで豊かさを実現したものとして考えられるのです。その後は、女性も重要な儀礼的な地位につくこともしばしばあります。

□結婚の儀礼と敵を殺したときの儀礼の類似

いろいろな儀礼を調べてみますと、結婚の儀礼と敵を殺したときの儀礼が、同じ構造を持っているということがわかります。例えば、ホールは敵を殺したときに性器を切除して持って帰りますが、儀礼をすることによって、その性器からひじょうに強い豊饒の力が、ホールの地にもたらされるわけです。

それと結婚のときの女性性器切除は、パラレルにとらえることができます。結婚をすると、通婚した姻族どうしは、互いに血が甘いと言うのですが、ホールと敵が互いに殺し合い、相手の血を求めるのも、敵とわれわれも互いに血が甘いからだというふうに言います。つまり、同じ言葉で結婚の関係と敵対して互いに殺しあう関係というのを表現するのです。これを例えば結婚に当てはめて考えると、女性というのは男性に略奪されることによって、その豊かさを初めて開花されるという形になるわけで、まさにこうやって女性が従属することによって初めて女性としての地位を認められるわけです。従属による主体化というのは、ホ

ールだけではなくて日本の女性についてもフェミニズムの文献なんかで言われていますが、ホールの場合はそれが儀礼によってはっきり出てきます。

ホールの伝統が表すものとは、何なのでしょう。それは男性が、敵や異人の首長によって表象される外部の力を、暴力により豊饒な力に転換し、それによって女性やウシを受胎させ、豊かさをもたらすという構図です。この伝統では、ホールの豊かさは、究極においては男性が、敵や首長のような外部的な力を持つ相手を、いかに制御するかによって依存しているようにみなされます。出産を通して集団を再生産する女性の力は、こうした伝統では、男性と外部との媒介者としての役割に従属させられ、貶められてしまいます。

このようにホールの伝統は、男性の力を社会の再生産の要に置くという、徹頭徹尾男性中心主義的なイデオロギーから成り立っています。そしてまた、豊かさはホールの男性の主体性によって獲得されるとすることで、支配的な国家に対する抵抗のイデオロギーともなります。

けれどもこのようなホールの伝統の性格は、後に見るように、過酷な国家支配の下で、それへの抵抗の戦術として構築されたものですし、またその男性中心主義的な側面が、精霊憑依によって内部から抵抗を受けることになるのです。そして精霊憑依による抵抗は、伝統が抗い、拒絶しようとしてきた国家支配の表象を流用することになるのです。

□精霊憑依の空間

次に精霊憑依の表象を見てみたいと思います。1960年代から精霊憑依がホールの中に入ってきました。アヤナと呼ばれる精霊です。アヤナというのは、神の風であるとか神の使いであるとか言われます。この精霊に憑依された人々によって、カルトのような形で集団が組織されます。これらの集団で指導的地位にある霊媒を調べたところ、全体の90%近くが女性でした。まだ憑依された人全員の数を数えているわけではないのですが、ホールの人口から考えると、女性の4、5人に1人は精霊に憑依されているのではないかと思います。

憑依は、まず病気から始まります。病気になったとき、ホールはまず伝統的な治療法を試みます。

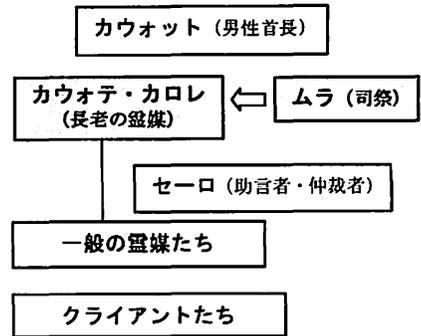


図1 憑依カルトの組織図

それが上手くいかないと、数十キロ離れた所にあるクリニックに連れて行って、そこで薬を処方してもらいます。しかしそれでも上手くいかないと、アヤナの霊媒の所に行きます。

精霊の霊媒は、誰かから呪いをかけられているなどと、病気の原因を特定します。その託宣どおりにやってみて回復する場合もあるんですが、回復しない場合は精霊がとり憑いた病気と考えて、降霊儀礼を行います。何日か儀礼を続けた後に突如、その人の口を借りて精霊が話し始めることがあります。このように精霊が憑依をすると、新たな霊媒が誕生することになります。一人の人間に、いろいろな精霊が憑依します。動物の精霊が憑依することもあります。しかしそのなかで主要な精霊というのは、すでに憑依されている他の霊媒から移って来ると言われます。ホールは、そうした精霊は蔦のようにどんどん広がっていくと言います。

ある霊媒の精霊が憑依して、新たな霊媒が生まれると、その二人は親子関係になる、と言います。こうして霊媒はどんどんと子どもを生んでいって、擬似的なリネージを形成します。そして、このリネージは、ひとつのカルトを形成します。図1にありますように、カルトにはムラと呼ばれる司祭がいて、彼の周りに彼が補佐をする長老の霊媒が何人かいます。ムラの下には助言者とか儀礼の補助者などの幾つかの役職につく者たちがおり、さらにその下に一般の霊媒たちがいます。

そのカルトの所に、病気などの悩みを持つ一般のクライアントたちが相談にいきます。ホールでは一般に長幼の序を重んじ、若年者は年長者に畏

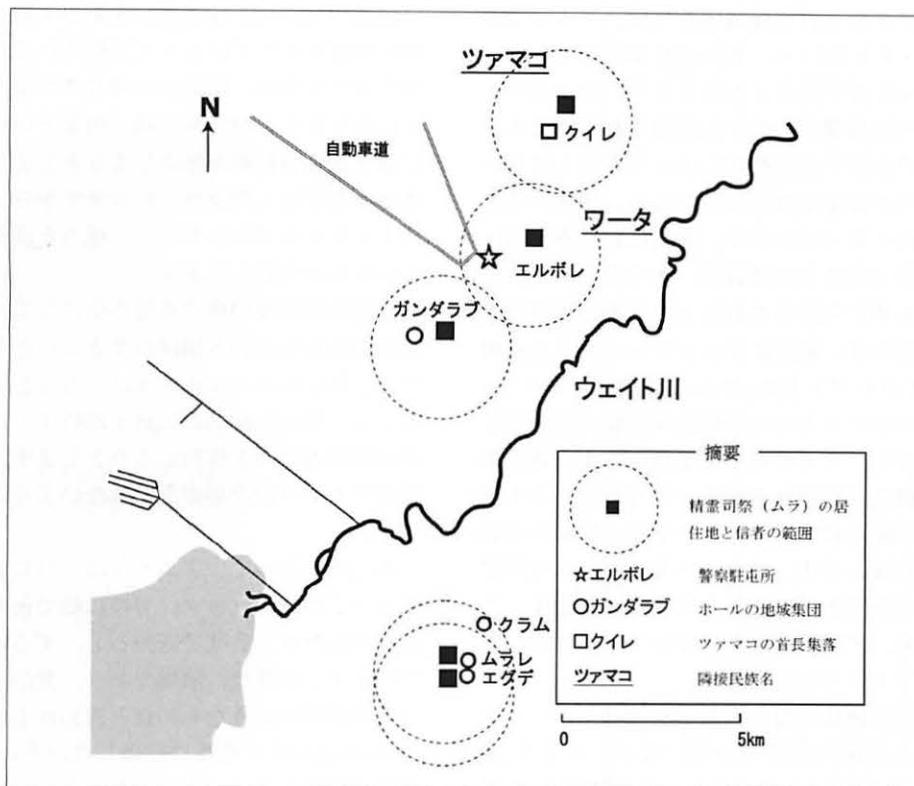


図2 憑依カルトの地域分布

敬と恐れを抱くと言われます。精霊憑依カルトのなかでも、この年長者への畏敬の感情は生きており、長老の霊媒に他の長老の精霊が乗り移ると、他の精霊は恐れをなして黙ってしまうと言われます。カルトの一番上には、カウォットと呼ばれる首長がいます。ホールの伝統的な首長と同じ言葉で呼ばれていますが、まったく別物です。

図2は全体のカルトの分布を示していますが、黒い四角はホールに現在5人いるムラをあらわしています。4人が男性1人が女性です。その周りに、何人かの長老の霊媒が、ムラの下でリネージュを持っています。これらのカルトは、北はツアマコという民族に広がり、東はワータ、西はハマルという隣接民族まで信者を広げています。しかし中心は現在ホールにあります。

このカルトではさまざまな儀礼を行いますが、日常的な降霊が行われる他に、占いとか病気治癒の儀礼も行われます。さらに、パネという儀礼を行って霊媒のグレードを上げることで、その霊媒

が一般の人の占いを行えるようになるといわれています。こうした精霊カルトは親族組織を横断しますし、地域集団もある程度横断しています。

ホールの伝統社会では、女性の行動というのは夫によってかなり強く制限されているのですが、このような儀礼では、女性は夫の言うことには従わず、儀礼に向かうことが可能になります。

□精霊が表象するもの

精霊とは一体何を表象しているのかということですが、それは、全くの異邦の精霊です。つまりホールの伝統では前面に出てくるハマルやツアマコのような隣接民族はほとんど出てきません。

憑依する主要な精霊は、現在ホールには来ることのないソマリ、それから精霊憑依がもともとやってきたと言われるボラナ、そしてホールが忌み嫌う高地人のアムハラ、そしてファレンジつまり白人などです。

儀礼の表象を見てみると、例えば日常的に行な

われるアッダルという降霊儀式では、アムハラのコーヒー・セレモニー、われわれがアディスアベバのホテルなどで見ることのできる、コーヒー・セレモニーの語彙がそのまま流用されています。そしてエチオピア帝国時代にホールを苦しめていたアムハラの官吏が持っていた杖が、精霊が降りてくる依代となっています。そこに供えるものは石鹸や衣服であるとか蒸留酒、現金といったアムハラ支配と共にもたらされたものであるわけです。

降霊儀式では、最初にチャップフェという草を撒きます。チャップフェとは、アムハラ語でコーヒー・セレモニーやクリスマスの時に床に撒く草を意味する言葉です。そして夜中の2時ごろまで歌を歌いながら儀式が行われますが、クルスというトウモロコシが配られます。クルスとは、アムハラ語で朝食を意味します。またコーヒーがシニーと呼ばれる小さな空き缶に入れられて配られます。このシニーも、アムハラがコーヒー・セレモニーのときに使うカップのことです。

精霊憑依の儀式に用いられる象徴は、ホールの歴史記憶と密接に結びついています。そこで19世紀から20世紀にかけてのホールの歴史を、簡単にお話ししたいと思います。

19世紀、エチオピア西南部のこのあたりはひじょうに流動的な社会でした。19世紀後半には、ベナディールの海岸からソマリの交易キャラバンがエチオピア西南部にもやってきています。イタリアの探検隊の記録を読みますと、実はホールはこうしたキャラバンと活発に交易をしていたことが分かります。ホールは象牙をオモ川上流のムルシにまで求めていって、それをソマリのキャラバンに渡してさまざまな交易品、つまりアメリカ産の彩色綿布のような物を手に入れていたということが書いてあります。ソマリはホールにとって外部からもたらされる富の象徴となりました。

しかし、19世紀の末、アムハラのメネリク2世の軍隊がこのあたりを征服して、エチオピアの版図を確立することで、ソマリとの長距離交易も衰退していきます。そしてホールはアムハラの軍隊に反抗したために、徹底的に略奪されて、20年以上にもわたって離散してしまうことになります。

1920年代の半ば頃によく、もといたウェイト川の流域に帰還しますが、それ以降帝国に貢納して暮らすこととなります。

1936年から41年の第二次世界大戦の頃、エチオピアはイタリアによって支配されます。その頃からホールでは、国家との仲介者が権力を握るようになります。1941年以降、国家との仲介者のポジションを首長筋が独占しようとしませんが、支配者側は有能な人間を欲しがりますから、実力主義による人が出てきたりして、権力を巡る争いがホールのなかで起こります。

仲介者が国家の権力を後ろ盾にして、ホールの人々を牛耳るという構図ができていきますが、一方では、多くのホールの人々は、首長を中心に押し立てて、家父長制的な伝統を維持することで、何とか仲介者の力を排除しようとし、儀式には全くアムハラ的な要素を入れないようにするわけです。

ホールにとって、アムハラは、ひじょうに悪いイメージで語られます。男性は蠍で後ろから刺すと言われたり、食欲で威張るし、ずるいと言われています。女性は、放埒であり、男から男へ移動する売春婦のようなものだと言われます。ホールでは、女性は必ず男性に従属しないとイケないし、男性に従属して子どもを産むことでホールの集団を再生産するのが良い女性ということですから、男から男へ移動するというのは、まさに許しがたいイメージです。

それに対して、自分たちホールのイメージというのは、男性は戦士である一方で、愚かで教育がないというコンプレックスもあります。女性は、集団の再生産を担って、ずっと家族の中に定着するというイメージがあります。

しかし、1975年以降の社会主義政権時は、エチオピア帝国時代のようなはっきりとした支配構造が徐々に緩んできて、ホールの男性にも国政に参加するチャンスが出てきます。そこで国家組織に参入しようとする者が増えてきます。しかし他方では、伝統的な家父長制を維持しようという、二重基準が男性のなかで生まれてきます。近代の果実（銃や衣服など）を手に入れようと、国家の政治に関与するものが増える一方で、アムハラへの対抗軸としてしばしば戦士のイメージが喚起されるという、矛盾した状況が見られます。ところが女性の方は、伝統によりきっちり留められていました。例えば男性に対する教育には別に強い抵抗はなかったのですが、女性への教育には、ひじょう

うに強い抵抗があり、政府相手に一触即発の戦闘になりそうな状況もありました。結婚相手を自分で決めようとするような女性は、ホールの女性の間ではアムハラのようなのだというレッテルを貼られます。

アヤナの精霊憑依は、1960年代に東のボラナから伝播してきました。最初にホールのなかでそれを担ったのは、ある女性でした。その後もアムハラにたくさん賄賂をあげたのに仲介者の地位の獲得に敗れて結局破産してしまった人であるとか、首長位の相続に困難をきたした人であるとか、仲介者の親族や近隣の人間が、アヤナの精霊憑依カルトに入っていきます。いずれもホールの伝統からみると、周辺の立場にある人たちでした。

1980年代は社会主義政権時代で、カルトは徹底して弾圧されます。そこで男性信者が一挙に離脱しますが、女性たちは残りました。そして現在、このカルトは女性たちを中心に担われています。憑依する精霊は、かつてのアムハラやソマリ、ボラナの精霊から移り変わって、EPRDFのジープに乗った兵士や飛行機に乗ってやってきた兵士たちの精霊が憑依したり、ファレンジ=外国人の精霊が憑依するという状況になっています。

この精霊は、一体何を表象しているのでしょうか。私はホールの精霊憑依は、女性の社会的なエンパワーメントになっているような気がします。けれども単純に、それが経済的利得のためかという、必ずしもそうではないと思います。もちろん、高位の霊媒になって占いをする人は現金をもらったり家畜をもらったりするわけで、経済的な利得も得ることができます。しかし、それよりもむしろ、一般の女性にとって大きいのは、リネージやクランを横断するカルトの一員になることに

よって、行動の自由を手に入れることではないかと思います。家父長制社会で、常に夫の監視の下にある女性にとって、これはひじょうに大きな行動の自由ではないかという気がします。

もう一つ、憑依を通じて世帯内における夫との権力関係を逆転させることができるということも、重要だと思います。ホールの男性は女性に対して、全ての男性がそうであるわけではないんですが、暴力を振るっても当然で、正当なことであると考えています。

ところが、女性がいったん憑依をすると、他のカルトの人間が集まってきて、徐々にその家庭内の力関係が変わっていきます。そのうちに、男性が病気になるたりすると、それは精霊の怒りだと説明されて、男性は恐れるようになります。

もう一つ精霊憑依の表象で見逃せないのは、敵対的価値の流用です。けれどもこれは精霊の没倫理性を強調するのかという、私は必ずしもそうは思いません。なぜ精霊の多くはホールの嫌悪するアムハラ、外国人の姿をとるのか。それは没倫理性というよりむしろ、ホールが伝統のもとで抑圧してきた欲望、つまり外部の富をあからさまに表象しているからこそ、これだけ広く精霊憑依が人々に受け入れられたのではないかと思います。

精霊憑依とは、ホールのなかに現れた屈折した近代の表象ではないか。伝統とは、まさに国家支配とか世界経済の浸透のなかで、自分たちのポジションを守るために維持されているものなのですが、そのなかでさらに抑圧されている人々が、こうした外部の表象を用いて伝統の空間イメージを解体するのが精霊憑依なのではないかと思います。

以上で報告を終わりたいと思います。

(みやわき・ゆきお／大阪府立大学)